

# 『用・強・美』備えたインフラを

うま  
く  
美し  
国



並河 良治氏

（なみかわ・よしはる）京大大学院工学研究科土木工学専攻修了後、建設省（現国土交通省）に入省。土木研究所つくば研究所技術推進本部長、道路管理センター常務理事などを務めた。NPO法人「美し国づくり協会」理事。



春田 浩司氏

（はるた・こうじ）阪大建築工学科卒業後、建設省（現国土交通省）に入省。近畿地方建設局営繕部長などを経て官房官庁営繕部長。2012年から公共建築協会会長。NPO法人「美し国づくり協会」理事。



石井 弓夫氏

（いしい・ゆみお）東大工学部土木工学科卒業後、建設技術研究所に入社。社長、会長などを経て名誉顧問。建設コンサルタント協会会長や土木学会会長などを務めた。NPO法人「美し国づくり協会」理事。

## 「美し国づくり」対談・鼎談シリーズ

3

「美し国づくり」対談・鼎談シリーズ3回目は、インフラ整備を通じて美し国づくりの在り方について、元土木学会会長の石井弓夫氏と公共建築協会会長の春田浩司氏、元土木研究所つくば研究所技術推進本部長の並河良治氏の3人に語り合ってもらった。キーワードは「用・強・美」。使いやすくて機能性に優れ、安全性・耐久性が高く、そして美しい。これらの要素を兼ね備えたインフラが美し国づくりの基盤となる。

並河 公共建築と土木それぞれの分野で長年にわたり活躍してきました。お二人を迎え、「用・強・美」の調和が取れた「美し国」の実現に貢献するというのがテーマでお話いただきたいと思います。「美し国」にはさまざまな要素がありますが、少なくとも美しい、豊かさ、安全・安心、いつもが欠かれないのではないのでしょうか。インフラ整備は、これらの要素を全て実現する基礎になるものだと考えております。日本は、古来より「美」を大切にしてきました。また、明治以降、工業化の時代には、技術開発にまい進し、物質的な豊かさを手に入れました。では、本日のテーマにまつわる日本のこれまでの歩みを振り返り、印象に残っている経験を紹介いただけますか。

石井 『美』に関して私はガガリンの「地球は青かった」という言葉に大きなショックを受けました。大学を出て2年目の1961年のことです。人類は地球をこのように見ることができると驚きました。今ほどに『美』の一つの原点があるように思っています。後になってガガリンの言葉を見ると、「宇宙は闊達だ」というのが付いていました。命にあふれた地球がある一方、

並河 「見たくないもの」が見えるのは悪い景観なので、それらを視界から取り除くことが必要という点ですね。三つの建造物はそれぞれ、道路、日本の主権、核なき平和への願いのシンボルで、特に原爆ドームは世界的にシンボリックな建物ですから、日本人として、矜持というか精神的な『美』をしっかりと守らなければならぬと思います。

石井 美しい景観を守ったり、維持したりするには非常にお金がかかります。国民が何を美しいと思うかという問題もありますが、美しいものにお金をかける行政であるべきです。

春田 感覚的な『美』は、主に目で感じるもので、目で見えないとなかなか分かりません。ですから「美しいもの」をしっかりと見ましょ。

## 子どもたちに「美しさ」教育必要

設置や、耐震性能の確保などです。さらには身体障がい者対策として建物のバリアフリー化や、省エネ化にも取り組んでいます。これらは「用・強・美」のうち、「用・強」に当たっては必要ではないでしょうか。

石井 建築の分野では「美」というものを狭く定義しているように感じますが、私が思う「美」は広い環境の一部のため、「美」を取り上げるといことは環境を取り上げるといふ感覚です。建築では「美」を狭く定義してごらうてはならないでしょうか。

春田 「美」については、さまざま考え方がありますが、建築でいう「美」は容形、内部の空間、中に入る人に与える印象、そういうものが多いいのではないのでしょうか。それと建築は単体だと、なかなか「美」をアピールできません。

水質浄化事業によって再生した隅田川



石井 それは非常に関心を持たれるところなのでしょう。建築家としての美意識の面がありますから、春田 その辺を取り違えてしまつと、「美」でもないものを「美」と勘違いする建築家が出てきたりします。むしろ建築がたぐさん集まると建築群になると、景観的に見ても「美」をつくり出す要素にもなり得るのではないかなと思います。

石井 私が社会人になったのは、高度経済成長が始まったあたりで、ダムや河川関係の仕事に随分と携わりました。合理的な構造物は美しいと思っていましたが、それほど「美」を意識して仕事をしていたわけではありません。その後、隅田川の水質浄化事業に関わったことが自分にとって転機となりました。環境を良くする仕事です。1964年の東京オリンピック前、隅田川は本当に汚れていました。そばに行くのが嫌な臭いがして川が黒々として見えていました。オリンピックで来る外国人にこんな川は見せられないということになり、水質浄化事業を大至急行わなければなりません。そこで「用・強・美」のレベルに達し、そこで問題点を意識して環境改善に取り組みし立場になったのは非常に幸せだったと思います。

## 土木・建築一堂に会した議論を

の頃あった堀を使ったといつ話を聞いたことがあります。

並河 先の東京オリンピックに合わせて新幹線や東名高速も建設されました。これらは将来の需要の伸びを見込んでの整備でもありましたが、世の中のニーズ、需要に合わせたものでもあり、しかもオリンピック開会式という期限に間に合わせなければならぬという制約がありましたので、美しさというところまで手が回せなかったのかもかもしれません。一方、石井さんのお話を聞いて、環境と景観はとも結び付きが強いといつことを改めて思いました。いくら河道やまわりの護岸をきれいにして川の水そのものが汚れているとランドスケープとして成り立ちませんから。

春田 建築物で歴史的に見て昔のもの、例えばヨーロッパの教会のようなのも、非常に美しい建物として残っています。その時代にもそのく力を注いでつくれた建造物は美しいものとして残り、これらが各エリア・地域の「絵」をつくる非常に重要な要素になっているといつことが言えると思います。土木構造物でもパリのエッフェル塔や、美しい橋梁にはそういった要素があるのではないのでしょうか。

石井 私は日本橋と国会議事室、原爆ドームを日本の「三醜景」だと思っています。いずれも構造物そのものが醜いわけではなく、周辺の高層ビルなどが景観を壊しているのです。

## 建造物は地域の「絵」をつくる要素

とか、「美しいものをつくりましょ」といふ働き掛けをすることによって皆さんの感覚を研ぎ澄ましていくようにする、周りが良くなっていくのではないかなと思います。

石井 そういふ意味ではわれわれ「建築屋」「土木屋」が、人間にとって何が美しく、何を美しいと感じるかといつことを理解する必要があります。これもわれわれの仕事の一つではないでしょうか。

春田 美し国に関する『美』について言えば、自然そのものが最も基本であり、それに何かが人工的なものを加えることによってプラスではなく、マイナスの方向に行く方が圧倒的に多いと思います。それを認識した上で、できるだけマイナスに行かせないで、ゼロへらいに収めることができればプラスにもつていけるという意識を持つ必要があると考えています。そういったものを評価してくれるのが、地域の住民ではないでしょうか。土木構造物であつても、建築物であつても、基本的には同じことだと思います。少なくとも美しい自然の中に溶け込むべからうの感じ、で『美』をプラスにもつていけるようにすべきではないでしょうか。

春田 今回の隅田川はきれいだと思います。魚釣りをしている人も結構いますから、たくさん魚がいるのでしょう。オリンピックの時は首都高建設も一つの使命のような感じで行われました。首都高のルートは、そ

春田 私思ひ出しつてみると、「美」に関していふように習った経験はほとんどありません。土木構造物でデザイン的に面白いな、良いなと思うのはやっぱり橋梁です。橋梁はさまざまな工法でつられ、アーチやつり橋、斜張橋などがあります。特に斜張橋は、見るからに美しいと思います。そのエリアのシンボルみたいに見えたりするわけです。隅田川などにはたくさん橋が架かっていますが、みんなきれいですね。

並河 「感覚を研ぎ澄ませる」といふに関連して『美』から少し外れますが、幼いころから景観に加えて、災害や事故に対する安全への感覚・感性を身に付けておく必要があると思つています。経験として関東大震災を語る人はいませんし、記録があつても今は当時とは状況が全く違います。防災について知識があつても、一度何か起きたとき、感性が磨かれていなければ実際に何をすべきか、とつさに判断できないと思います。

春田 「美し国」を前に進めたいためには、美し国づくり協会として、そういった意識が広がるような活動を展開していくべきだと思います。さまざまな団体との連携や、各団体の会員に協会の取り組みを紹介してもらうなど、情報発信の幅を広げていただきたい。

石井 私も当協会の活動を強化したいと思っています。具体的には土木学会と建築学会を美し国づくりについで協働することを申し入れたいというのはどうでしょうか。土木学会は、防災に関して活発に活動しています。景観や『美』の問題についても高い意識を持っています。橋梁のデザインマニュアルがまとまられて50年程度がたちますし、現在もデザイン委員会という大きな委員会をやってやっています。ただ、マニュアルはあくまでやり方ですし、デザイン委員会の方も政策を提言することより、もっとも技術的な活動です。土木学会には『美』の重要性を社会に訴えてほしいと思つています。

並河 両学会間は活動協力を促す覚書を締結し、さまざまな取り組みを一緒に進めています。美し国づくりについても一堂に会して議論してもらえればと思います。

「美し国づくり」対談・鼎談シリーズの1回は2月21日付、2回目は2月27日付に掲載。